9784486021728

1923039027000

ISBN978-4-486-02172-8

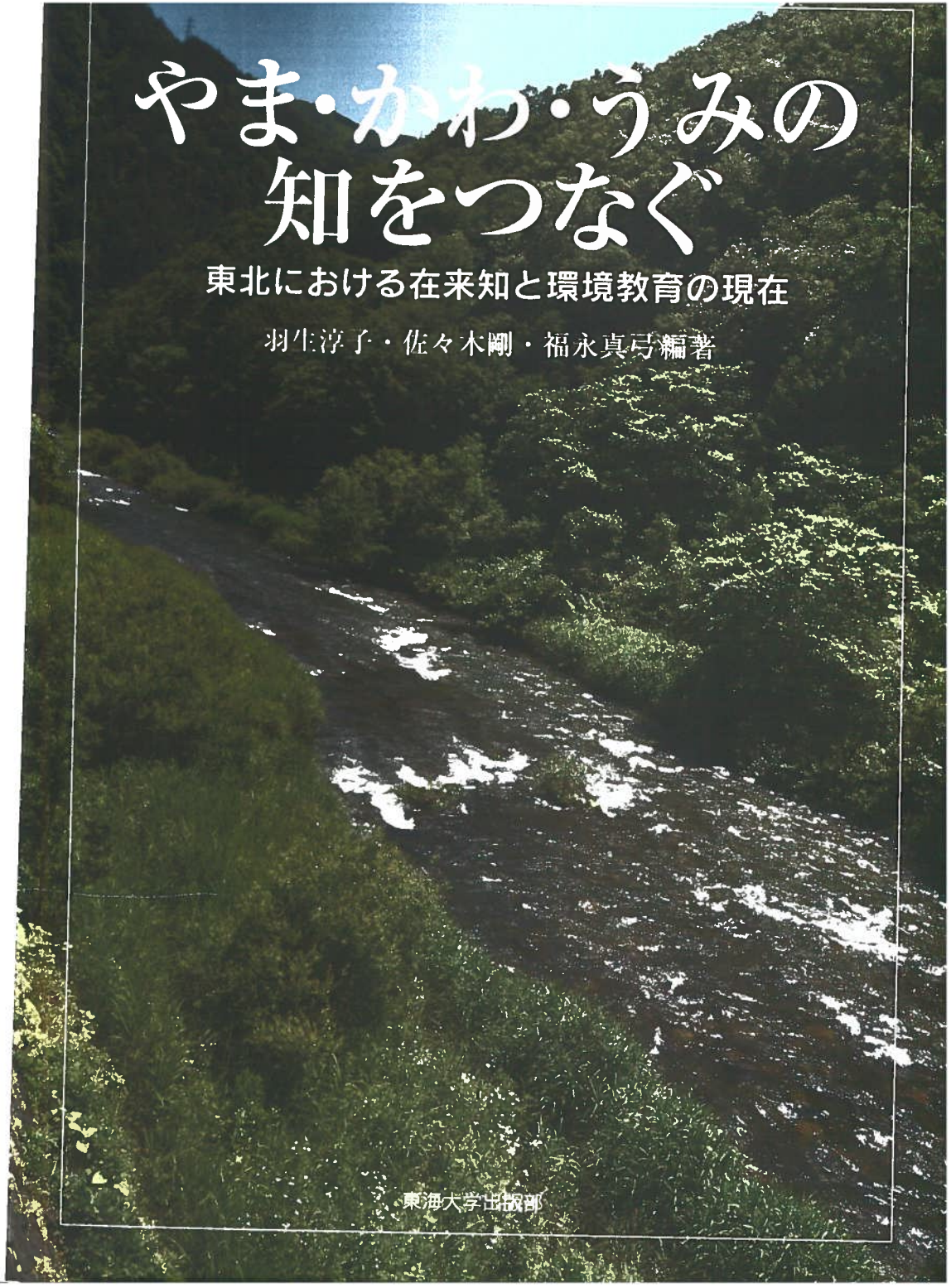
C3039 ¥2700E

定価（本体 2700円＋税）

やま・かわ・うみの知をつなぐ

東北における在来知と環境教育の現在

羽生淳子・佐々木剛・福永真弓 編著



やま・かわ・うみの知をつなぐ

東北における在来知と環境教育の現在

羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編著

東海大学出版部

本書は公益財団法人日本生命財団の助成を得て刊行された。

Weaving the Knowledge of Mountains, Rivers and the Ocean: Traditional Ecological Knowledge and Ecoliteracy in Tohoku, Northern Japan

Edited by Junko HABU, Tsuyoshi SASAKI and Mayumi FUKUNAGA
Tokai University Press, 2018
Printed in Japan
ISBN 978-4-486-02172-8

口絵 1　閉伊川中流で川流れを体験する子供たち（岩手県宮古市箱石，2016 年 7 月 30 日）

山下祐介（2012）『限界集落の真実－過疎の村は消えるか？』筑摩書房.
Berkes, Fikret (1993) Traditional ecological knowledge in perspective. In *Traditional Ecological Knowledge: Concepts and Cases*, edited by Julian T. Inglis, pp. 1-9. International Program on Traditional Ecological Knowledge, Ottawa, and International Development Research Centre, Ottawa.

目　次

はじめに　羽生　淳子・佐々木　剛・福永　真弓　ix
1．「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫」プロジェクトの成り立ちとその概要　ix
2．研究対象地域　x
3．研究地域別の活動と本書の構成　xi
4．まとめ　xiii

第1部　理論的・方法論的視点

第1章　在来知・科学知とレジリエンス
―景観と文化の長期的変化を考える視点から―　羽生　淳子　3
1．豊作があれば不作もある―不作・凶作に備える準備―　3
2．在来知―西洋科学とは異なる世界観―　4
3．レジリエンスの理論からみたシステムの時空間的変化　6
4．歴史生態学からみた在来知
―環境と人間の相互作用からみた文化景観の長期的持続性と物質文化―　9
5．おわりに　11

第2章　在来知ネットワークからとらえる未来　福永　真弓　13
1．在来知はなぜ重要なのか　13
2．在来知とは何か―重なる世界を生かす方法　16
3．ネットワークの中の在来知―遊びと遊び仕事から　20
4．「在来」であることを獲得するための仕掛けづくりへ　29

第3章　在来知と環境教育　佐々木　剛　33
1．はじめに　33
2．環境教育のこれまでの経緯と現状　34
2.1　人間環境宣言における「環境問題の教育」　34
2.2　ベオグラード憲章　35

2.3　トビリシ宣言　36
2.4　世界環境保全戦略とブルントラント委員会最終報告　37
2.5　国連環境開発会議におけるリオ宣言とアジェンダ21　37
2.6　テサロニキ宣言　38
2.7　第二次環境基本計画　39
2.8　「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」　39
2.9　「持続可能な開発目標（SDGs）」　40
3．環境教育の方向性　42
4．在来知を取り入れた環境教育の意義　46

第2部　閉伊川流域のやま・かわ・うみにおける在来知と新しい試み

第4章　須賀の絵解き地図を描く
―風景の「上書き」を超えて―　福永　真弓　51

1．環境の潜在可能性を維持し，豊穣化させる必要性　51
2．環境の「上書き」のダイナミズムから捉える価値の生成・構造化のダイナミズム　54
3．五感が記憶する風景から環境の「上書き」のダイナミズムをおこす　56
3.1　須賀の風景の聴き取りを支える材料を作る　56
3.2　五感から風景をおこす　57
3.3　絵解き地図が示す複数の風景―環境の「上書き」のダイナミズム　61
4．環境の潜在可能性を育むために　63

第5章　川のサクラマスがつなぐ山と海
―子供たちと一緒に考える科学知と在来知―　佐々木　剛　67

1．なぜ，川のサクラマスか　67
1.1　「森川海のつながり」を基調とした内発的発展のための地域づくり教育の可能性　67
1.2　東日本大震災後の内発的復興のために　68
1.3　「環境教育プログラム」の開発会議　68
1.4　プログラム決定の会議プロセス　70
1.5　サクラマスサミットの開催　71
2．水圏環境教育プログラムとは？　72
2.1　水圏環境リテラシー基本原則　72
2.2　水圏環境教育の目標とは？　72
2.3　ラーニング・サイクル理論と水圏環境教育　73
2.4　自己決定理論　74

3．川のサクラマスの生活史　75
3.1　サクラマスの生活史　75
3.2　サクラマスの研究手法　75
3.3　明らかになってきた宮古のサクラマスの生態　76
4．閉伊川流域の生きる知恵「在来知」　78
4.1　インタビューに見る「森川海のつながり」と人とのつながり　79
4.2　思い出と願いや想いとの関係　86
4.3　教材開発の方向性　87
5．閉伊川サクラマス MANABI プロジェクトの開発　88
6．「サクラマス MANABI プロジェクト」がもたらす認識の変容　90
6.1　児童生徒の認識の変容　90
6.2　流域住民の認識の変容　94
7．考察と展望―森川海の地域づくり教育による内発的復興の可能性―　96

第6章　主食の多様性，在来知とレジリエンス
―歴史生態学からみた北上山地旧川井村地区の文化景観―
真貝　理香・羽生　淳子　99

1．はじめに　99
2．調査地域の概要と先行研究　101
2.1　調査地域の概要　101
2.2　先行研究　102
3．聞き取りから考えるヤマの暮らしとその変化　103
3.1　聞き取り調査の対象とその概要　103
◇コラム１◇
在来知を次世代に伝える　佐々木冨治さん・アキさん（農業）　107
3.2　周年サイクル　108
3.3　穀類　109
3.4　豆類　113
3.5　シタミ（シダミ・ドングリ）・トチ・クリ　114
3.6　クルミ　116
3.7　ジャガイモ　116
3.8　山菜・キノコ・果実　117
3.9　焼畑　119
3.10　林業・畜産・養蚕・葉タバコ栽培　122
3.11　凶作と災害への対応　126
4．産地直売所・地域ネットワークと新しい試み　128
4.1　やまびこ産直館　128

◇コラム 2 ◇
食で地域と人をつなぐ　神楽栄子さん（やまびこ産直館・組合長）　129
4.2　雑穀ブーム―何を作るか―適地適作・在来知を活かす　131
◇コラム 3 ◇
よみがえる雑穀栽培の「在来知」　嵯峨均さん・良子さん（嵯峨農園・かわい雑穀産直生産組合長）　132
5．山は宝だ―環境教育における在来知―　135
6．考察と展望―在来知から見たレジリエンスの重層性と景観保持の重要性―　137

第７章　ヤマを生かす焼畑
―生態学からみた土と森―　金子　信博　141

1．焼畑がヤマを壊す時―マダガスカルの事例　142
1.1　焼畑民の村　143
1.2　常畑のリスク　145
2．焼畑土壌の生態系観測―奥出雲での研究　146
3．閉伊川上流小国の土地利用と土壌　150
4．焼畑の持続可能性を考える　154

第３部　比較研究

第８章　核被災と社会のレジリエンス
―福島県内における小規模経済の新しい試み―
後藤　康夫・後藤　宣代・羽生　淳子　163

1．調査の目的と概要　163
2．福島県農民運動連合会メンバーのさまざまな活動　164
2.1　県農民連の活動と再生エネルギーへの転換
―福島市（中通り地域）・佐々木健洋（たけひろ）さん（県農民連事務局長）　165
2.2　風評ではなく実害を明言し，トータルな視点から福島の農業の将来を考える
―二本松市（中通り地域）・根本敬（きょう）さん（県農民連会長）　167
2.3　福島のおコメは安全ですが，食べてくれなくて結構です―南相馬市・相馬市（浜通り地域）・三浦広志さん（NPO 野馬土代表理事）　169
2.4　小規模ミルクプラントの持続可能性と「ささき牧場カフェ」―福島市（中通り地域）・佐々木健三・智子さん夫妻・国府田（こうだ）純さん　171
2.5　考察　174
3．再生エネルギーの地産地消活動―21世紀型経済社会の始まり―　175
3.1　「いのちと生活」の危機と立ち上がった社会運動　175

◇コラム 4 ◇
大友良英さん　（ミュージシャン，プロジェクト FUKUSHIMA! 共同代表）からの聞き書き　176
3.2　再生エネルギー地産地消活動の代表的な事業体とその特徴　177
3.3　典型としての会津電力，その理念と活動　178
◇コラム 5 ◇
佐藤彌右衛門さん　（大和川酒造 9 代目当主，会津電力社長）からの聞き書き　179
3.4　考察―安藤昌益と田中正造から21世紀型経済社会へ―　180
4．在来知と科学知の結合―レジリエンスの担い手としての女性―　181
4.1　環境，災害における女性の視点―世界と日本―　181
4.2　女性の地位と福島　181
4.3　女性たちのレジリエンス活動　182
4.4　福島と世界をつなぐ　184
◇コラム 6 ◇
鈴木二三子さん　（一般財団法人　国際女性教育振興会福島支部長，有限会社グリーンタフ工業代表）からの聞き書き　184
4.5　考察―女性の地域づくり参加への重要性―　185
5．展望―在来知と多様性，ネットワークの重要性―　185

第９章　生業の多様性と漆
―歴史生態学からみた二戸市浄法寺地区の漆産業―
伊藤　由美子・羽生　淳子　189

1．はじめに　189
2．文献史資料による歴史的背景　189
2.1　浄法寺地区の地理的環境　189
2.2　近世　191
2.3　近代から現代　192
3．聞き取りによる戦後の産業の変遷と漆　193
3.1　吉田信一さんからの聞き取り―漆と生業の歴史的な移り変わり―　193
3.2　大森清太郎さんからの聞き取り―漆掻きの変遷と在来知―　194
3.3　聞き取り成果からみた漆掻きと生業の多様性　196
3.4　産地直売所にみる昭和30年以降の農・林業の変遷　197
3.5　小野知子さんからの聞き取り　197
4．まとめ　198
4.1　生業の変遷　198
4.2　生業の多様性の中の漆　199
4.3　漆掻きにみる在来知とレジリエンス　200

第10章　食の多様性・ストック・共助の重層的レジリエンス
―北上山地山村における危機への対応事例から―　岡　恵介　203

1．北上山地山村の自給的な食生活と木の実　203
2．森や畑が恵む保存食料　204
3．危機に備える保存のための在来知の展開　209
　3.1　ストッカーの普及　209
　3.2　ストッカー利用の実態　211
4．北上山地山村における危機への備えと対応　214
　4.1　平成23（2011）年豪雪による停電と一部集落の孤立　214
　4.2　ストッカーの貢献とサブ・ライフラインの存在感　215
　4.3　平成28（2016）年の台風による停電と集落の孤立　217
　4.4　孤立集落へ　218
5．ストックの持つ意味と重層的なレジリエンス　222
　5.1　多様な農山村におけるストックの持つ意味　222
　5.2　食の多様性・ストック・共助の重層的なレジリエンス　225

第４部　コメントと展望

第11章　NPO 活動における海との共生と在来知　橋本　久夫　231

1．はじめに　231
2．失われてゆく砂浜と漁労文化　231
　◇コラム７◇
　津波復興余話―未来へ伝え残すために　震災遺構「たろう観光ホテル」　233
3．自然体験活動の重要性　234
　◇コラム８◇
　海の供養塔にみる津波碑の教訓　236
4．復興における文化化を目指して　237
　◇コラム９◇
　津波碑が伝えるもの　238
5．おわりに　239

第12章　地元民からみる，サクラマスを通しての学びの可能性
―地元の経験と学識をつなぐ―　水木　高志　241

1．はじめに―閉伊川大学校ではじめた体験学習の試み―　241
2．マインドフルネスでみつける共通のスタート地点　242
3．サクラマスをめぐる体験学習の年間サイクル　243
4．地元市民と研究者の協働作業　245
5．在来知から見たサクラマス―生涯サイクルの多様性―　246
6．おわりに―在来知・科学知とひとのつながり―　247

第13章　在来知のちから　小山　修三　249

1．在来知と科学知　249
2．日本の主食の歴史　249
3．焼畑という農業　251
4．飛騨山地の焼畑ムラ　252
5．川井村のインタビューから見えるもの　253
6．これからの課題と人類学者の役割　254

第14章　「わかる」と「できる」をつなぐプロジェクト
―在来知をともにつくる試み―　杉山　祐子　257

1．「生きる場」に生まれる知　257
2．在来知の科学性　258
3．「見ればわかる」ことと，対象を「意思あるもの」として扱うこと　260
4．在来知と環境への現代的働きかけ　261
5．環境の変化・担い手の変化と在来知の共創にむけた試み　262

第15章　総括　羽生　淳子・佐々木　剛・福永　真弓　265

あとがき　羽生　淳子・佐々木　剛・福永　真弓　271

索引　275

引用文献
かたやまいずみ（2015）『福島のおコメは安全ですが，食べてくれなくて結構です』かもがわ出版.
クライン，ナオミ（2011）『ショック・ドクトリン（上）（下）』岩波書店.
クライン，ナオミ（2017）『これがすべてを変える（上）（下）』岩波書店.
後藤宣代（2002）『男女共同参画社会と地域再生』福島県男女共生センター.
後藤宣代（2014）「『3.11』フクシマの人類史的位置」後藤宣代・広原盛明・森岡孝二・池田清・中谷武雄・藤岡惇『カタストロフィーの経済思想』昭和堂，1-61頁.
後藤康夫（2014）「ハリケーン・カトリーナの衝撃とニューオーリンズの未来」福島大学国際災害復興学研究チーム編『東日本大震災からの復旧・復興と国際比較』八朔社，179-197頁.
後藤康夫・森岡孝二・八木紀一郎編（2012）『いま福島で考える』桜井書店.
塩谷弘康・岩崎由美子（2014）『食と農でつなぐ』岩波新書.
鈴木二三子（2005）『里山の言い伝え』嶋中書店.
ソルニット，レベッカ（2011）『災害ユートピア』亜紀書房.
似田貝香門・吉原直樹編（2015）『震災と市民』東京大学出版会.
根本敬（2012）「命を脅かす原発とわれわれは共存できない」後藤康夫・森岡孝二・八木紀一郎編『いま福島で考える』桜井書店，41-55頁.
根本敬・小出裕章（2012）「食べるべきではない，と，作るべきではないを切り分けてほしい」http://blog.livedoor.jp/amenohimoharenohimo/archives/65797682.html（2018年1月27日アクセス）.
宮本憲一（2014）『戦後日本公害史論』岩波書店.

第9章

生業の多様性と漆

―歴史生態学からみた二戸市浄法寺地区の漆産業―

伊藤　由美子・羽生　淳子

1．はじめに

本章では，岩手県二戸市浄法寺地区で私たちが行った民族学的な聞き取り調査の成果の一部に基づいて，この地域を特徴づける漆産業と生業との関わりおよびその歴史的変化，漆掻きにまつわる在来知，そして在来知に基づくレジリエンスについて考察する。研究目的のひとつは，第6章で扱った閉伊川流域における北上山地の暮らしと，同じく岩手県北にありながら，より平地が多い浄法寺地区の事例を比較することにある。

浄法寺地区における今日の漆の生産量は全国1位で，浄法寺産の生漆は国産品の8割以上を占める。戦後，国内から次々と漆の産地が無くなる中で，浄法寺では伝統的産業としての漆の生産が続けられ，近年では，浄法寺産漆というブランド化に成功している。しかし，順調に見える漆生産も，一方で高齢化や後継者の減少などの課題をかかえている。

歴史的に見ると，浄法寺地区のほぼ中央を流れる安比（あっぴ）川沿いには街道があり，隣接する八幡平市安代，二戸，さらに下流の八戸とは古くから交流・交易が行われてきた。特に安代で作られた木地に浄法寺で漆を塗って漆器にし，地区内の天台寺境内や城下町である八戸で販売するなど，川を通じたつながりは閉伊川流域と共通するものがある。

2．文献史資料による歴史的背景

2.1　浄法寺地区の地理的環境

浄法寺地区は岩手県の内陸北西端部にある（図9.1）。奥羽山脈の西側に位置し，北側を青森県と接している。地区の北西部には標高1078 m の稲庭岳があ

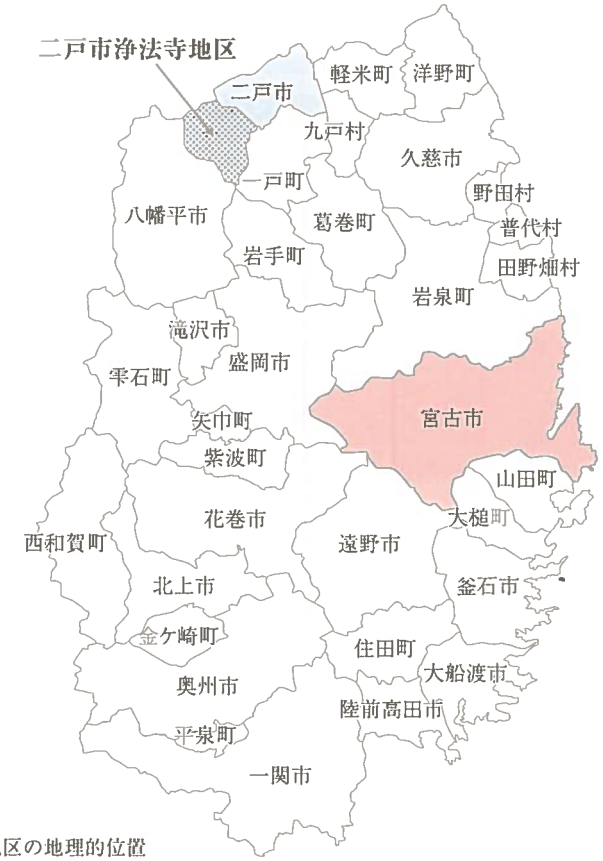


図 9.1　浄法寺地区の地理的位置

り，西側に位置する安比川まで丘陵が伸びる（図9.2）。『浄法寺町史上巻』（浄法寺町史編纂委員会，1997）によれば，地区の約 8 割が森林と山地で占められている。

浄法寺地区のほぼ中央には，南から北に向かって安比川が流れている。安比川の起点は南に隣接する八幡平市にあり，浄法寺地区を縦断して二戸市で馬淵川と合流し八戸市へ下り，太平洋に注ぐ（浄法寺町史編纂委員会，1997）。安比川は古くから物流の手段に使用され，筏などにより八戸市まで物資を運搬していた。

植生は冷温帯落葉広葉樹林を基本とする。浄法寺地区の南側および西側の標高800 m 以上の地域では，ブナを主体とする日本海型の森林が広がる。

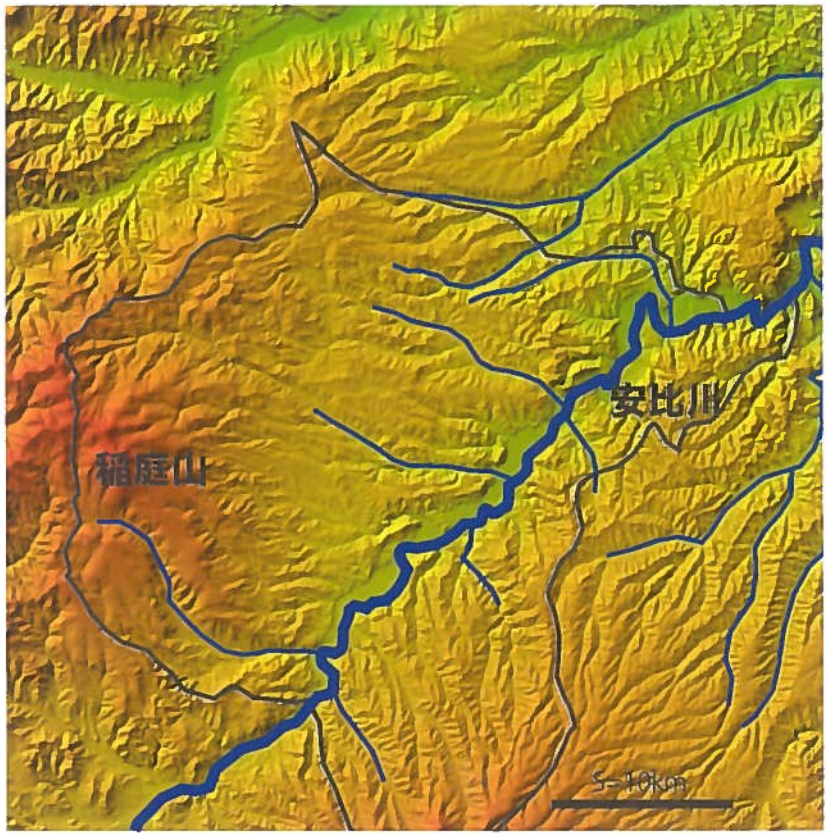


図 9.2　浄法寺地区付近の地形図（国土地理院地図（電子国土 WEB）を使用して作成）

2.2　近世

『浄法寺町史上・下巻』（浄法寺町史編纂委員会，1997，1998）によると，浄法寺地区は，福岡（二戸市）から鹿角（鹿角市）の鹿角街道上に位置し，幕府巡検史および歴代藩主の巡検の道筋にあたった。地区内では農業・林業・畜産（馬産）と漆の生産を行っていた。農業は稗・大豆・蕎麦が主体となっていた。米の生産量は少なく，ヤマセなどの影響により作柄にムラがあった。

伝統的な生漆の生産方法としては，１本の木から数年にわたり漆を掻き取る養生掻きを行い，漆蝋も生産していた。工藤紘一（2011）の研究によると，承応元（1652）年における二戸地方の漆生産量は，盛岡藩全体の47.7％を占めている。漆と漆蝋は課税の対象で，藩が統制する御禁制品でもあった。また，安

比川の上流に位置する現在の八幡平市安代町は木地の産地で，それに漆を塗ったものが浄法寺塗として文献などに記載されている。

2.3　近代から現代

次に，同じく『浄法寺町史上・下巻』に基づいて，近代から現代までの生業の変化をみてみよう。

2.3.1　農業

近世同様に，畑作による稗・大豆・麦・蕎麦などの畑作が主体で，稲作は畑作の1/3を占める程度だった。大正期は，大正12年のデータによると，米5797石，大豆2999石，麦1741石，稗4560石で，雑穀栽培の占める割合が高かった。昭和に入り，品種改良などで米の収量は上がり，昭和30～40年代には主要な産品となった。しかし，現在では減反され，減反した水田の一部では蕎麦を栽培している。

昭和30年代から葉たばこの生産が始まり，この地域の主要な産業となる。昭和39年頃に拡大し，昭和50年前後が最盛期だったが，現在はお金を渡して作付けを減らしている。最盛期には町内で約25億円を売り上げた。平均の年収は約400万円程度あった。

2.3.2　林業

昭和20年代まで，ナラ・クリ・キリなどの落葉広葉樹が植栽された。大正期には，炭焼きの生産量が日本一となるなど，木炭の生産量が高く，主要な換金作物となった。昭和15年頃に再び増産するが，その後，昭和30年を境に徐々に減産する。一方，昭和10年代中頃から杉・松の植林が始まるが，現在は価格が下がっている。

2.3.3　畜産業

明治期は馬が主体で軍馬などを生産し，大正初期まで主要な産業だった。昭和に入っても，二戸地方の25％を占めるなど馬産地として知られた。昭和30年代から，食用牛の飼育数が増加する。

2.3.4　漆の生産

明治前期に福井県越前から「越前衆」とよばれる漆掻き職人が来て，漆の樹液を1年で掻き取って切り倒す「殺掻き」と呼ばれる技法を伝えた。それまでの「養生掻き」より「殺掻き」のほうが採取できる樹液の量が多く，生産量が増加し漆掻き職人の数も増えた。昭和前半まで漆の木は，木の実を蝋に，樹液を生漆に，木をアバ（漁具）にする換金作物として主要な資源となった。

第二次世界大戦直後に，漆の全国的な需要の高まりにより，大幅に生産量が増えたが，中国産の漆の流通が増えしだいに減産し，職人の数も減少する。漆の木も減少したため，文化庁助成により日本文化財漆協会が発足し，漆の植林をはじめる。また平成7年に，浄法寺塗の工程を公開しながら展示・販売する「滴生舎」がつくられ，現在漆の町づくりの中心的な存在となっている。

3．聞き取りによる戦後の産業の変遷と漆

以上の歴史的背景を踏まえて，今回の調査では，まず第一に，浄法寺地区に在住する漆掻き職人の方たちに，漆掻きとその他の生業の変遷や，漆にまつわる在来知について聞き取りを行った。ここでは，そのうち，戦前～戦後の漆掻きの歴史的変遷，漆の木の生態と漆の植林に焦点をあてて，吉田信一さんと大森清太郎さんから伺った聞き取り内容の一部を紹介する。

漆掻き職人の吉田信一さんは1934年生まれ。インタビュー時には84歳。漆掻き職人の大森清太郎さんは1947年生まれで68歳。

なお，吉田さんへの聞き取りとしては，日本うるし掻き技術保存会（2000）による先行研究がある。今回は，その記載を踏まえて，今回の聞き取りで得られたことを記述している。

3.1　吉田信一さんからの聞き取り―漆と生業の歴史的な移り変わり―

17歳から漆掻きを始めました。祖父は馬車でお米を運ぶ運送業をしていて，大地主へ小作人の米を運んだりしていました。父は吉田家に婿として来て，一時期は東京で仕事をしていましたが，その後は浄法寺で漆掻きをしました。兄1人と私が漆掻きを継いで，数年前から消防署に勤めていた弟も，定年後に漆掻きを始めています。

漆掻きは6月の入梅の頃から11月までの仕事です。昭和40年代頃までは，冬は切り倒した漆の木で漁業の浮子（アバギ）を作って売ったり，製材所の手伝いなどをしていました。現在ではアバギは作っていません。家には，畑と水田があり，米・稗・大豆・野菜類を作って自給するほか，米は農協に出荷しています。

約20 haの山林があり，杉と，少しだが漆を植林しています。昭和35年頃までは畑の周りに漆の木が植えられていましたが，耕耘機を入れるときに邪魔に

なるなどの理由で減っていき，今では植えている家は多くありません。

漆の木は，土と手入れが良ければ，樹液の出が良くなります。山に植えても，手入れが悪いと質の良い樹液は出ません。また，漆の木は15年程度育ったら，漆を掻いて切り倒してしまうため，木が減ってきている。もっと前から植樹するべきだったと思います。

昭和10年頃から30年頃までは漆の需要が多く，何人かの掻き子（漆掻き職人）を家に泊めていました。

現在，漆はなかなか売れません。昨年はほとんど売れず，売れなかった漆は家の床下に保管しましたが，今年は全部売れました。日光東照宮の修復で需要があったからです。

漆の木には，適した場所があります。土には，赤い土とか黒い土とか白っぽい土とかありますが，やはり赤い土か黒い土が良い。また，漆には湿度が必要です。ある程度湿度があるほうが，漆が長持ちします。

大きな木を~~[illegible]~~掻くときには，「ああ，いい木を買った」と思います。しかし，そうしていると「いやあ，あそこいい木だと思って大きい木を買ったけど，出なくて分からなかった」ということもあります。

漆の木の植林の際には，山を皆に分けて植林しました。葉タバコの栽培が忙しいなど，他の理由で行けない人がいても構いません。しかし，手間ひまをかけて手入れをしないと，せっかく植えた木が雑草に負けて駄目になってしまいます。

漆を掻きたいから，毎年下草を刈って，そして肥料を少しずつやって手入れしています。現在，皆が手入れができずに放置されている山もありますが，山の持ち主から「自分は掻かないからお前が掻け」といわれたので，手入れをして，去年は掻きました。やはり，漆掻職人として自分がやっていくためには，掻ける漆を造林しないといけません（聞き取り年月日：2015年４月12日）。

3.2　大森清太郎さんからの聞き取り―漆掻きの変遷と在来知―

中学校を卒業して，15歳から漆掻きを始めました。曾祖父と祖父は運送業をしていて，馬車で物資を二戸や八戸などに運びました。それ以前は，物資は，主に安比川で筏に荷を積んで運んでいましたが，曾祖父が浄法寺で初めて運送業を開業しました。

漆掻きは父から始めました。祖父は養子で，（実父から）父を漆掻き職人にしてほしいといわれ，それに従いました。父は手先が器用でみこまれたんです。

漆掻きだけで生計をたてるのは難しいので，農業（米・大豆・野菜）と漆掻きを両立していました。現在，農業は，自給できる量を作っています。農産物は売っていません。

漆掻きは自給用の田んぼが基盤になっています。また昔は山仕事があり，春は植林，夏は下刈り，冬は伐採，炭焼きと，結構，山に携わることがたくさんありました。山に小屋を建て冬場は寝泊りをして働きました。昭和30年代には，11～４月まで出稼ぎをした人もいます。今，出稼ぎは一人もいません。現在，他県から来た若手の漆掻き職人は，冬の季節は漆塗りをしています。

山林もあります。昭和40年代，父の代から山に漆を植え始めました。それ以前は松や杉を植えていました。以前は畑の周りに漆の木があり，木の周りが掘り起こされて成長も良く，樹液が取れました。漆の木は里山で育った，里漆といっていましたが，農業が機械化されて，漆の木が邪魔になり，減っていきました。

漆の木は，手入れして育てて若い葉がたくさん茂ればよい木になりますが，手入れしないと貧弱になります。下草を刈って置き，その草が腐敗し，有機質の肥料になって木が育ちます。また，山には漆が育ちやすい適地があります。適地を見極めて植えないと良い樹液が取れません。

漆を掻き終わって切り倒したらすぐ植えていかないと，木の数が減っていきます。先に植えて育てていかないと，安定した樹液が出てきません。原木は減って，掻き取る人が多くなると，乱獲して木がなくなります。掻き取る人がそれなりに少なければ持続しますが，１年に20人が毎年掻き取るだけの量はここにはありません。植えた木は全部が全部，育つわけではなく，その辺のところが難しいのです。すぐ掻き取らないと，枯れてしまったり，いろいろな障害が出たりします。どんどん掻き取り，伐採して育てることが必要です。

漆は，木が軟らかくて育ちが良いと，良い漆が取れます。樹皮の色とか，皮がカサカサしていたら，どうしても堅い。見た目が奇麗だと，木も軟らかい。手入れの仕方で軟らかい木になります。木が軟らかいと，傷つけるときも落とすときも軟らかく，掻く効率もいい。掻きやすいと不純物もあまり入らない。

漆はその日によって漆の質が変わるし，午前・午後・早朝・晩でも異なります。タカッポに掻いた漆を入れ，家に帰って大きい樽に入れます。

漆を掻く量は，現在は，１日で約70本，４日間で一周期なので，１年間で約

280本の木から樹液をとります。

樹液の出には，雨が大きく影響します。ある程度，雨が多いほうが私はいいと思う。毎日，日照りで稼げたら，たまに雨が降っても，木が余計に出してくれるから，それでいいのです（聞き取り年月日：2015年12月24日）。

3.3　聞き取り成果からみた漆掻きと生業の多様性

以上の聞き取り成果から浮かび上がってきたのは，漆掻きには，日々の変化，季節という周年サイクル，年毎の漆の出来不出来と需要の違い，そして戦前から戦後にかけての歴史的変化，というさまざまな時間的なスケールの変化が組み合わさってきたことだ（本書第１章参照）。異なる時間的なスケールに基づくサイクルが相互に交錯し，いったんは退潮に向かっていた伝統工芸としての漆生産が，現在，再び注目を浴びている。

さらに聞き取りにより，漆生産の盛衰が他の生業の動向と密接に関係していることも明らかになった。漆掻きの作業は，おおよそ５月から11月までの限られた期間しか行われない。そのため，漆掻き職人の仕事は，他の生業の季節性に大きく左右される。

聞き書きの成果からは，昭和初期までは冬は炭焼きや，切り倒したウルシの木で漁網の浮子を作っていたが，昭和40年代から木炭業が衰退したため，冬場は炭焼きという生業が成り立たなくなり，冬場は東京へ出稼ぎに行ったりしたことがわかる。漆掻き職人の家でも水田や畑を持ち，米は農協にも出しているが，農業の基本は自給用で，豆・野菜も自給している。山林を持つ職人もあり，ウルシの木を植栽して，掻いている。今回は紙数の関係で紹介できなかったが，他県から来た若手の職人の中には，農地を持たないために，冬期には二戸市などでアルバイトをしたり，自分で掻きとった漆で漆器などを作成したりして生計をたてている人もいる。

近代から現代にかけて，農業・林業を含む農村部の生業は全国的に大きく変容し，米の生産量の減少，松・杉の価格低下，高齢化などのさまざまな問題を抱えている。このような困難な状況にも関わらず，浄法寺では漆生産が時代を超えて維持され，将来への新しい動きが模索されている。

筆者らは，浄法寺で現在まで漆掻きが持続しているのは，農業・林業を含めた多様な生業との組合わせが大きな要因ではないか，と考えている。今回の聞き取りの成果は，聞き取り数は少ないが，このような筆者らの予測と一致するものだった。

3.4　産地直売所にみる昭和30年以降の農・林業の変遷

戦後の歴史において急速に変容する農業の中で，新たな取り組みとして注目されるのが，昭和30年代以降に立ち上げた産地直売所「キッチンガーデン」だ。それまで男性が主体とした農業の中で，「キッチンガーデン」は女性が中心になって運営され，収益をあげ成功している。副会長である小野知子さんから，その経緯や取り組みについて聞き取りを行った。

3.5　小野知子さんからの聞き取り

キッチンガーデンは組合で，現在の所属者は39名。平成８年にオープンし，来年で20周年になります。女性の組合員が中心で，年代の構成は50歳代が中心ですが，40歳もいます。売り上げは年々伸びていて，個人の売り上げは，平均で１週間に２～３万円，多い人で５～６万円です。売り上げは本人の収入になり，臨時の出費や孫への小遣いなどに充てる人もいます。

産直であるキッチンガーデンができる前は，41クラブとか，生活改善グループの活動がありました。また，県道沿いに個別に野菜の無人販売所をつくっていました。産直があったらいいなという女性の意見が出て，市の事業で建物を建ててもらいました。

キッチンガーデンには，盛岡・秋田県鹿角市・青森県八戸市からも買いに来ます。車でわざわざ買いに来る人も多く，天台の湯の温泉に日帰りで来た二戸市・青森県三戸町の団体客がマイクロバスで寄ることもあります。主に町の人や，年配の人で宴会の帰りに寄ることもあります。隣のデイサービスを利用する人も寄ってくれます。混む時間は午前では10時から12時，午後は２時から３時で，休日のほうが来る人が多い。

野菜類は，女性の組合員が中心に出荷しています。スーパーで買うよりも値段が安く，新鮮で日持ちするといわれます。出荷する品物がないとき，逆に多いときは調整します。

野菜は，今は夏の残りでハクサイ・キャベツ・ネギ・ダイコン，葉物はホウレンソウ，コマツナ，ミズナと，結構，種類はあります。ここは，ハウスを使っているため，３月ぐらいまで葉物があります。椎茸などは菌床でつくっています。また，キノコ類は１組合員がマイタケ・キクラゲなどをつくっていま

す　山菜は自分の山へみんな行っています　たけのこ（ネマガリタケ）は，岩手山や稲庭高原へ行きます　山菜はほとんど近くの山でとります　キノコも同じです

キッチンガーデンを始めるまでは，自宅で食べる分の野菜を作っていました　畑は実家のもので，3反あります　実家は農業をしていません　実家と自宅で使う2軒分の野菜を作っていました　主人も協力してくれるようになって，今は夫婦で協力して出荷しています　量がふえたら，自然にやってくれるようになりました　ほかの組合員の場合も，ご主人が手伝ってくれています　自然に周りを巻きこんでいる　女性一人でやるのは大変だから

キッチンガーデンができて忙しくなりました　土日に品物を出すので，土日がなくなりましたが，平日に自分が好きな時に休んでいます　キッチンガーデンも20年目でちょっと余裕ができたかも　あと10年がんばらないといけない　新しい人が入ってきてほしい

これから3月までハウスでホウレンソウ・コマツナなどの葉物野菜をつくります　米も作っています　米も売れますね　価格設定が自分でできるので，安く出すと買ってくれます　売るときに精米するので美味しいと評判が良いです（聞き取り年月日：2015年12月23日）

4．まとめ

4.1　生業の変遷（図 9.3 参照）

浄法寺には，奥羽山脈に近く安比川に沿うという地理的特徴がある　この地理的な条件の中で，この地では，近世から農業・林業・畜産業などが小規模な単位で営まれ，かつ人々はそれぞれを複合し生業としてきた　その中での漆掻きは，夏場の季節的な作業だったことから，戦後直後のごくわずかな期間に専業であったことを除き，他の生業との組合せとして続いてきた　農業ないし林業を専業に行う人々が多い中で，漆掻きはその中間に位置づけられる　漆掻きと他の生業とは，必ずしも互いに密接な関係はないが，集落内でそれぞれの生業活動が小規模かつ自律的に機能することで，集落全体としては生業の多様性が維持されてきたと考えられる

さらに，昭和30年代以降徐々に衰退してきた農業の中で，浄法寺が都市部である八戸・盛岡の中間に立地する利点を活かした産地直売所が，現在では新たな収入源となり，集落の維持・継続に大きな役割を果たしている

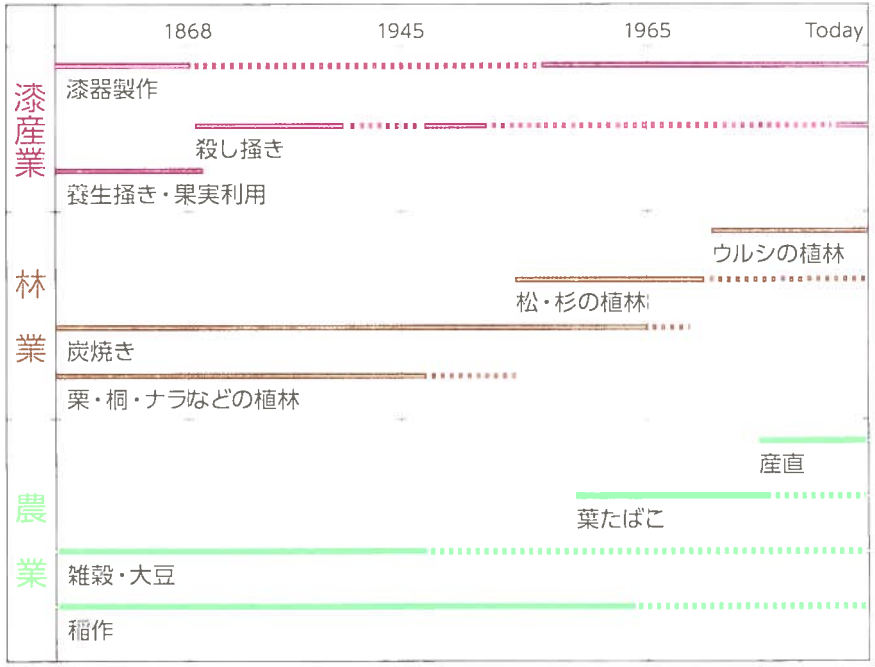


図 9.3　浄法寺における生業の変遷

このように，浄法寺では，小規模な農業と林業，畜産業を組合わせることで，時代の状況に合わせて柔軟に変容することが可能となり，生業の多様性が維持されてきたといえる

その中で漆の生産は，近世から課税の対象になるなど主要な産物であり，明治以降，第二次世界大戦直後まで換金作物として重要だった　特に，大正期には漆掻きを専業とする者もいた　しかし，漆は夏場しか収入にならないため，専業で漆掻きをできた期間は短く，最盛期でも農業・林業と複合して行われてきた　聞き取りによると，現在でも多くの漆掻き職人は，漆掻きを農業や林業などと組合わせて行っている　しかし，他県から来た研修生が浄法寺に残って行う場合，冬季は漆塗りや土木作業のアルバイトなどを兼業し，収入は多くない　どのようにして若手の収入を増加させるか，が課題となっている

4.2　生業の多様性の中の漆

漆の国内での需要減と中国産漆の輸入量の増加により，全国的に産地が減少

する中，浄法寺地区で漆産業が継続できた大きな要因として，漆産業が農業・林業のなどと複合して行われてきたことがあげられる。漆の収入が減少しても，昭和30年代までは冬季の炭焼き・出稼ぎがあり，40年代以降は農業（米）と併せて行われてきた。

また，上記のように，『浄法寺町史』によると，山地・原野が地区の８割にあたる。葉タバコの栽培開始などの生業の変化によって，畑周辺で漆が栽培できなくなっても，山地に漆を植林することができたことも重要だ。山地では，近世から昭和30年代までナラ類の炭焼きが行われ，伝統的に山林を維持管理するシステムが構築されてきた。それが基盤となって，漆の植樹がスムーズに行われたと考えられる。

昭和30年代以降に始まった産地直売所では，山菜も販売され，売り上げにつながっている。山菜が産地直売所での収入になることは，集落内で春・秋に山菜を採集することで，山林の維持にも役立っていると考えられる。

漆の木の造林は，漆を掻き取り終わると切り倒されるため，掻き手と掻き取られる漆の木との需要と供給のバランスがあり，大規模な産業とはなり得ない。また，下草刈りなどの手入れを行わないと良い漆が出ないなど，漆掻き職人の在来知によるところが大きい。

一方，漆掻き職人が山に入り漆を掻くことは，木の下草の手入れなど山の維持管理に役立っている。漆掻き職人のうち，聞き取りをした中では山菜を採る人はいなかったが，漆掻きのために手入れされることにより，山菜・キノコが育ちやすい環境が整えられている。個々の生業が時代に変化により変わっているが，大きな目でみると，それぞれが生業の多様性の中の一つであり，小規模な生業のそれぞれが相互に組合わされることにより，集落の維持につながり，その中で漆産業が持続してきた。

今後の課題としては，後継者の育成と，これらの生業のありかた（組合わせ方）が重要になる。

4.3　漆掻きにみる在来知とレジリエンス

漆掻きは漆の木を植え，漆を掻き，切り倒し，根から萌芽再生した木を育てるという持続可能な産業といえる。切り倒した木（幹）もかつてはアバギとして再利用され，現在でも薪として燃料にされる。

さらに今回の聞き取り調査から，漆の木は，下草を刈り，それを捨てずに根元において肥料にすること，土や湿度，霜の有無など生育する環境を選ぶことなど，人が常に維持管理することで良い樹液を出すことが明らかになった。

漆掻き職人は，漆の木の見極めから掻くタイミングまで代々受け継がれてきた在来知に基づき作業している。さらに彼らは，漆の木を通じて生育する山の環境を意識してきた。山が維持管理されることで，山菜などが生育する環境も維持されている。漆掻きと産地直売所は直接のつながりはないが，山を通じてつながっている。同様のつながりは，他の農業・林業でも認められる可能性が高い。

浄法寺地区で，漆産業が近世から現代まで維持されてきた理由としては，土地を通じて個々の産業が相互につながり，時代の変化に柔軟に適応できたことが大きい。このような生業の多様性と柔軟性は，第６章で考察した閉伊川上流域の旧川井村の例と同様に，地域のレジリエンスに直結する。浄法寺地区と旧川井村は，ともに岩手県北部に位置し，平地が少なく，稲作よりも雑穀栽培を主体としたという共通点がある。山の幸を含めた食の多様性と，雑穀を主体とした主食の多様性，そして食の保存技術を基軸としたこれらの地域の伝統的な暮らしは，歴史的には，炭焼き，畜産，養蚕，葉タバコ栽培，漆掻きなどの小規模な生業・産業と組み合わさって生業複合を形成してきた。個々の生業・産業に盛衰はあるものの，組み合わせとしての生業複合は，多数のバックアッププランを持つという点で，地域全体のレジリエンスの高さにつながる。今後，これらの両地域を含む山がちな地域に位置する小規模コミュニティのレジリエンスについて，従来の経済成長モデルとは異なった視点から再評価を行う必要がある。

謝辞

本章をまとめるに当たり，大森清太郎さん，小野知子さん，吉田信一さんからは，お話を掲載することについてご快諾いただいた。さらに，フィールド調査では，泉山和徳さん，泉山義夫さん，岩舘巧さん，内田美央子さん，小田島勇さん，小村剛史さん，久保田拳司さん，工藤竹夫さん，中村啓子さん，松田卓生さんをはじめとする地元の方々のお世話になり，成果のまとめに際しては，そのお話の内容を参考にさせていただいた。また，つぎの諸機関には，調査を行うに際してご協力をいただいた：岩手県浄法寺漆生産組合，産地直売所キッチンガーデン，（株）浄法寺漆産業，滴生舎，天台の湯，二戸市漆振興課。な

お，2015年１月～７月の調査については，当時，総合地球環境学研究所小規模経済プロジェクトの研究員だった大石高典さん，砂野唯さん，濵田信吾さんと同プロジェクトメンバーのWilliam Balée さん，Steven Weber さんの協力を得て行った。末筆ながら，これらの方々と機関に深く感謝の意を表する。

引用文献

工藤紘一（2011）『いわて　漆の近代史』川口印刷工業．
日本うるし掻き技術保存会編（2000）『漆―漆に生きる職人の暮らし―』．
浄法寺町史編纂委員会（1997）『浄法寺町史上巻』浄法寺町．
浄法寺町史編纂委員会（1998）『浄法寺町史下巻』浄法寺町．

第10章

食の多様性・ストック・共助の重層的レジリエンス

―北上山地山村における危機への対応事例から―

岡　恵介

2016年夏の８月29日，台風10号の甚大な被害を受けた岩手県の北上山地北部の岩泉町安家地区は，私が昭和61年から19年間暮らし，結婚し，子育てをしながら調査を行った，故郷のような場所である。その頃に地場のクリやカラマツを用いて建てた家は，今も安家地区の上流集落・坂本にある。

藩政時代から，凶作飢饉を幾度も経験してきた北上山地の山村（森，1969，1970）は，今日においても危機に備えて，在来知による多くの伝統的な保存食料やサブ・ライフラインなどをストックしてきた地域である。これまでも，このような北上山地山村の地域特性については指摘してきた[1]。そのストックの具体的な実態と変容，災害によって集落が危機に瀕した時に，それがどのように活用されているのか，ごく近年の事例を交えながら見ていきたい。

１．北上山地山村の自給的な食生活と木の実

北上山地の山村は伝統的な畑作地帯であり，そこに暮らしてきた村人の多くは，畑で生産される雑穀を主食として生きてきた。昭和40年以降に開田が進むまでは，ほとんど水田を持たない村が多く，村人の主食はヒエと大麦が大きな位置を占めていた。当時は，地元で「旦那様」と呼ばれる山林大地主の食卓にあっても，白米だけのご飯を食べるのは盆と正月だけで，コメと雑穀や麦を混合した三穀飯と呼ばれるご飯を主食としていた（岡，2008，2016）。

もちろん今日では，水田で収穫したコメを食べ，茅葺屋根をトタンに替え，携帯電話を操り，インターネット・ショッピング（以下，ネット・ショッピング）をする，都市近郊の農村と変わらぬ暮らしが営まれている。畑で雑穀が栽培されることは激減し，あってもかつてのような自給用ではなくほとんどが販